知的障害特別支援学校中学部における
地域の産業・専門家と連携した職業教育の研究

名古屋　恒彦*・名須川　美智子**・中館　崇裕***・熊谷　佳展***・岩渕　昌文***
今井　真実***・田村　英子***・田淵　健***・竹野　郁子****・金丸　温****

（2011年３月４日受理）

Tsunehiko NAGOYA・Michiko NASUKAWA・Takahiro NAKADATE
Yoshinobu KUMAGAI・Yoshihumi IWABUCHI・Mami IMAI・Ken TABUCHI
Eiko TAMURA・Ikuko TAKENO・Yutaka KANAMARU

A Study of Regional Society and Specialists Collaborating on a Career Education Program
in the Lower Secondary Department of a Special Needs School

1　問題と目的

2009年３月に告示された特別支援学校学習指導要領では、「地域や産業界等と連携し、職業教育や進路指導の充実を図ること」とされている（文部科学省、2009）。これらの記述は、高等部段階で強調されるものであり、職業教育についての実践研究は、中学部段階で低調であることが指摘される（名古屋、稲邊、田村、田淵、2008）。

しかし、知的障害養護学校に高等部が設置されたのは1957年であり、知的障害教育で職業教育が活発化した1950年代の実践は中学段階における実践が主であった。そこでは今日、生活単元学習あるいは作業学習と称される実践形態で、実際的な生活の中での働く活動を通じて、自立的生活力の育成が図られた（名古屋、1996）。青年期に位置付く中学段階での職業教育の意義は、今日いっそう強調されてしかるべきであろう。

それらの問題意識の下、名古屋らは岩手大学教育学部附属特別支援学校中学部における作業学習、働く活動をテーマにした生活単元学習の実践研究を通じて、中学部段階での職業教育のあり方を検討してきた（名古屋、稲邊、田村、田淵、2008；名古屋、稲邊、田淵、大嶋、2009；名古屋、名須川、田淵、田村、岩井、2010）（以下、「附属先行研究」）。その結果、生徒たちが、実際的なテーマの下に現実度の高い本格的な働く活動に取り組むことで、主体的に活動する姿が実現できること、活動の発展過程で、地域住民や自治体、製作活動にかかわる地域の産業との連携が自然かつ実際的に展開できることが示された。

また、地域の中での働く活動は自ずと地域環境への関心を生徒たち自身がもてる状況につながった。その結果、地域美化や近隣の果樹の剪定材や間伐材を利用した製作といった環境に配慮した活動も自然に生徒たちの日常に定着している。このことは教育活動の生活化を指向する知的障害教育の視点からESDが自然かつ実際的に展開されたと見ることもできよう。

ところで、附属先行研究において地域社会との関わりを深めつつ生徒たちが生産活動に取り組む過程で、これまでも専門的な知識を有する専門家

＊岩手大学教育学部特別支援教育科、＊＊岩手県立宮古恵風支援学校、＊＊＊ 岩手大学教育学部附属特別支援学校、
＊＊＊＊岩手県立盛岡峰南高等支援学校、＊＊＊＊＊盛岡市少年鑑別所

とのかかわりがあった。地域の様々な専門家との連携を図ることは、活動の現実度を高め、より本格的に展開していく上でいっそう効果的であると考えられるし、生徒の地域社会での生活の自然な深まりを期待できる。

そこで本研究では、附属特別支援学校中学部で実践される、働く活動を中心とした生活単元学習の授業研究を通して、生徒の主体的取り組みを実現し、かつ地域の産業や専門家と連携した持続可能な開発に資する職業教育の展開方法を明らかにすることを目的とする。

2　方　　法

本研究では、以下の二つの方法を実施する。

(1) 附属特別支援学校中学部における授業研究

①対象授業

2009年10月に中学部全員で取り組んだ生活単元学習「ミニショップなかまを完成させよう」(単元期間：10月１日～21日）を対象授業とした。本単元は、2009年度前期に取り組んだ「ミニショップなかまを作ろう」の第２期単元に位置付けられており、中学部作業学習で使用する「ミニショップなかま」の外壁や周辺部分の製作・施工を中心的活動とする働く生活単元学習である。生徒の得意な活動を大切にし、「木れんが」「土木」「資材」「建築」の４グループに分かれ、分担で作業を進める単元展開であった。

②授業検討会の実施

本研究は、それまでの附属先行研究が対象授業を、作業班や学級といった中学部の一部の生徒による取り組みとしていたのに対し、中学部全員で取り組む生活単元学習を対象とした。このことにより、本研究は中学部教員全体で取り組むこととなった。そのため、学部研究会や公開研究会分科会の場を利用し、単元計画段階、単元展開中（授業研究)、単元終了後の３回の授業検討会を行った。

本研究では、授業検討会における授業者（中学部教員）及び参観者（名古屋）の授業についての発言を、「単元･題材の設定」「日程計画」「活動内容」「場の設定、教材・教具」「教師･友達のかかわり」「保護者・地域の人々とのかかわり」の６つの視点で整理した。この視点は、附属特別支援学校における授業検討の視点である（岩手大学教育学部附属特別支援学校、2009)。本研究の研究目的が附属特別支援学校中学部における、「実際的な生活」における「主体的に活動する」姿の追究（岩手大学教育学部附属特別支援学校、2009）と同一であることや、本研究の研究組織が事実上附属特別支援学校中学部と一体化したこともあり、附属特別支援学校中学部での日常の実践研究との連続性を高めるために、この視点での整理を行った。

これらを、生徒主体の活動、地域の産業や専門家との連携の効果、及びＥＳＤの観点から考察した。

検討会の日程・内容は以下の通りである。

○第１回（2009年８月25日）：対象授業単元計画検討。

○第２回（2009年10月16日）：対象授業研究。

○第３回（2009年12月１日）：対象授業反省。

(2) 他の特別支援学校における生活単元学習等の視察・資料収集

ここでは、現実度の高い生活単元学習や作業学習を実践している全国の実践校のいくつかを筆者の一人である名古屋が訪問し、授業視察と資料収集を実施し、中学部教員に資料を回覧し、情報を共有した。

3　結果と考察

(1) 授業検討会

①授業検討会結果

各検討会記録を６つの視点で整理した結果は、資料１～３の通りである。

②単元計画検討結果（資料１）の考察

「単元・題材の設定」では、前単元からの継続ということから、生徒の仕事への思いや「ミニショップなかま」をより良くしたいという思いを大切にした取り組みが意識された。

「日程計画」では、午前中めいっぱい活動できる時間の確保、グループごとの活動の場が錯綜しないような日程調整など、生徒が存分に活動できるための日程が意識された。

「活動内容」では、４グループの分担による、得意な活動に沿った分担作業、前単元での得意な活動を継続・発展する分担、新しい活動への挑戦など、生徒の様子に合わせて力を発揮できる活動内容が意識された。製作活動以外のチラシ作りなども生徒が担当することで、活動への意欲や見通しをもちやすくする計画もとられた。

「場の設定、教材・教具」では、生徒の活動しやすさや存分に活動できる活動量などを考慮し、道具等の工夫の他、素材（外装ユニットや木れんが）の形状への対応も検討された。

「教師・友達のかかわり」では、グルーピングを、前単元での成果を踏まえつつ、より活動できる視点で見直した。

「保護者・地域の人々とのかかわり」では、前単元での専門家の助言に加え、専門家と生徒が共に活動するようにして、より意欲的に、かつ専門的な指導の下で活動できるように考えられた。

③授業研究結果の考察（資料２）

資料２では、参観者であった名古屋の意見を整理して示した。

「単元・題材の設定」では、実際的で本格的な活動が、より意欲的で主体的な取り組みにつながったことなどが指摘された。

「日程計画」では、本時が活動の一区切りであることにかかわって、満足感・成就感をもてる手立てとしての日程計画の成果が指摘された。

「活動内容」では、生徒の習熟が、自己判断を実現していることが指摘された。このことは、当初の活動選択の適切性を示唆している。

「場の設定、教材・教具」への指摘が最も多くあった。本時の授業参観では、この部分が最も検証しやすい視点であることを示すものである。いずれも生徒が主体的に活動するためにとられた道具や場の工夫が指摘されている。

「教師・友達のかかわり」では、難度の高い建築作業で教師が共に活動しながらどのように支援すれば、生徒主体の活動につながるかが問題提起されていた。

「保護者・地域の人々とのかかわり」では、本時の授業そのものではないが、精度の高い作業活動から伺われる専門家との共同活動の効果が指摘された。

④授業反省の結果の考察（資料３）

「単元・題材の設定」では、前単元からの継続であったことから生徒たちから、より良い改善という点で意見が出やすかったことが評価された。「ミニショップなかま」の完成により、作業学習で大切にされる生産から消費までの一貫し、かつ持続的な学習が可能になったことが評価された。

「日程計画」では、前単元と同様の流れであったことがスムーズな取り組みにつながったことが評価された。活動時間を十分とったことが評価された一方で、グループによってはより柔軟に活動時間を設定することも提案された。単元のしめくくりに向けた製作活動以外の取り組みの計画についても改善することでより満足感のもてるしめくくりになるのではということが指摘されている。

「活動内容」では、繰り返し取り組むことにより、より主体的な取り組みが実現できること、製作活動以外にもテーマに沿った活動に生徒主体で取り組む良さ、専門家の参加により活動内容の精度が向上したことなどが評価されている。事前に計画されていたグループ間の活動の錯綜への対策が効果的であったことも指摘された。

「場の設定、教材・教具」では、前単元からの活動の継続による道具等の改善精度の向上にかかわることが複数評価されている。グループごとに場が離れていることは、課題として指摘されている。場を共有することでの見通しやテーマ意識の共有に関する意見であったと考えられる。また、本単元で専門家との連携により、材料を廃物から再利用する幅が広がったことなどが評価された。

「教師・友達のかかわり」では、教師が生徒と共に活動することで、その場でしかできない必要でかつ臨機応変の指導が可能になったことが評価

された。

「保護者・地域の人々とのかかわり」では、家庭向けの通信が保護者のテーマ共有にもつながったことが評価された。「ミニショップなかま」自体が地域とのつながりの重要な意義を有していることも指摘から推察される。

（2）他校の視察・資料収集

①視察・資料収集結果

視察および資料収集を行った特別支援学校は、県外６校（山形県２、長野県、石川県、熊本県、佐賀県）であった。佐賀県は知的障害・肢体不自由対象、他の５校はいずれも知的障害対象校である。

山形県では地域の名物を図案化した作業製品、長野県では竹炭製作、石川県では地元の太鼓演奏家とのコラボレーション、佐賀県では地域の名産である陶芸等を生かした製作活動というように、地域産業や文化と密接な取り組みが多く見られた。地域産業とのかかわりは、その土地での専門家との連携を容易にし、製作物や活動の質の向上が図られると共に、児童生徒が地域で「顔の見える存在」になることにもつながり、より良い地域生活に寄与するものがあった。

作業活動を見学することができたのは、山形県２校、長野県、熊本県、佐賀県であったが、いずれも道具の工夫により、より安全に、より正確に、よりたくさんの仕事ができる状況を整えていた。また、石川県ではコンピューターソフトを独自開発し、音楽活動に取り組みやすくするなどの工夫が見られた。

個々の道具や補助具の情報は、本研究で対象とした授業におけるばかりでなく、広く参考になるものであった。

いずれも地域に密着し、地域の中で本格的な活動に取り組むことが、児童生徒の意欲的な姿の実現につながっているように考えられた。

４　総合考察

本研究で目的とした、生徒の主体的取り組みを実現し、かつ地域の産業や専門家と連携した持続可能な開発に資する職業教育の展開方法という点から考察する。

（1）主体的取り組み

主体的取り組みを実現するということでは、単に単元ごとの計画にとどまらず、単元間の関連性（テーマや活動）があることが、より主体的に取り組める条件の一つとして指摘できる。ある段階では新規の単元も、生徒の経験の拡大という点から必要であるが、共通のテーマや活動で単元を積み重ねることもあってよいであろう。また、実際的で本格的な活動は、生徒の意欲的な取り組みを実現する上で、大いに資するところがある。社会的に有用で、存分に活動できる活動量があることなどは、その具体的な要素として上位にあげられよう。

繰り返し活動することでより習熟すること、見通しをもちやすくなることも望ましい要件である。

また、道具･補助具や場の改善を不断に行っていくことで、生徒の作業活動の向上が認められたことが多々報告されている。これは事前計画段階からも意図されていたことであり、その意図に沿った手立てが生徒の望ましい姿につながったものとして評価できる。繰り返しの活動は、生徒の習熟につながるが、教師による授業の反省と手立ての改善という一連の活動（PDCA）をより適確に行わしめる条件でもある。

（2）地域の産業や専門家との連携

本研究の対象授業では、新たに造園や建築といった分野での専門家との連携を試みた。実際に活動を計画する上で、生徒の様子を最もよく知るのは教師であるが、仕事を最もよく知るのは造園や建築の専門家である。それぞれが専門性を発揮し、情報交換を行うことで、より生徒が力を発揮しやすい活動が展開できた。専門家が授業に共に参加することで生徒の意欲的な取り組みも増した。地域の産業や専門家との連携は、地域理解や地域生活の向上という側面だけでなく、授業での生徒の主体的取り組みの向上にも深く関わってい

る。

地域での持続可能な生活を目指すことと生徒主体の学習活動を目指すことは、結果的には同一軸で見ることができることが示唆される。

(3) 持続可能な開発に資する職業教育

作業学習や生活単元学習は、本来実社会での生活そのものを学校教育として展開することを意図する。その意味では、持続可能でかつ発展していく学習形態であると見ることができる。本研究では、「ミニショップなかま」の設置により、地域の中で持続可能性の高い作業学習を展開できる余地が拡大した。このことは、単元設定次第で、より地域社会での持続的で発展的な学習活動を展開できることを示唆している。

ESDの観点からも、本研究の対象授業を通じて、地域産業の中には、まだ多くの再利用可能な資源が眠っていることを、専門家から学ぶことができた。単なる消費ではなく、再生による学習の可能性は、本研究に先立つ附属先行研究より広がりを見せた。このことは、職業教育に限らず今後の授業づくりでも活用可能な知見であろう。

職業教育という視点で見れば、本格的な製作活動、社会的に有為な活動に継続的に取り組むことで、働くことのやりがいや手応えを自然に意識し、かつ整えられた状況下で作業能力を個々に発揮しその力を高めていくことができる。これらの教育的価値を生かした授業実践が、中学部という青年期の前半にある生徒たちの働く生活の質を高め、将来の職業生活により良く接続していくことが期待できよう。

文献

岩手大学教育学部附属特別支援学校（2009）：研究紀要20. 岩手大学教育学部附属特別支援学校, pp. 総３－総４, 中１－中５.

文部科学省（2009）：特別支援学校学習指導要領解説　総則等編（幼稚部・小学部・中学部）. 教育出版, pp. ６－７.

名古屋恒彦（1996）：知的障害教育方法史生活中心教育戦後50年. 大揚社 ,pp.70－79.

名古屋恒彦、稲邊宣彦、田淵健、大嶋美奈子（2009）：知的障害特別支援学校中学部における地域産業と連携した職業教育に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第８号 .pp.161－171.

名古屋恒彦･稲邊宣彦･田村英子･田淵健（2008）：知的障害特別支援学校中学部における職業教育の充実のあり方に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第７号. pp.175－182.

名古屋恒彦・名須川美智子・田淵健・田村英子・岩井雅俊（2010）：知的障害特別支援学校中学部における地域社会・産業と連携した職業教育に関する研究. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第９号. pp.85－96.

【資料１】単元計画検討記録の整理

①単元・題材の設定

・前単元「『ミニショップなかま』を作ろう！」（以下、「前単元」）後の生徒の思いを大切にし、完成を目指す本単元を設定する。

・活動内容や場などの計画に当たっても、生徒の意見や思いを大切にして計画していく（例:「建物の周りに木れんがを敷きたい」）。

②日程計画

・午前中の３・４校時をグループごとのメインの作業活動にあて、午後の５校時は、テーマに関連した活動（壁新聞作り、チラシ作りその他）をグループごとに行うようにする。活動量を踏まえ、グループによっては午前中の作業活動を午後に継続する場合もあるようにする。

・建物周りでの木れんが設置を予定していることから、土木グループの木れんが敷設作業と建築グループの外装ユニット設置作業の場が重ならないように、両グループの作業日程を調整する。

③活動内容

・前単元の４グループを維持し、前単元の

活動を生かした取り組みができるようにする。
・４グループの編成は、基本的に前単元を継続するが、前単元での生徒の様子、活動の必要性の有無（必要性が少ないと指摘された工程等）、本単元での工程の必要性などから見直しを行う。
・建築グループは、前単元で活動中の待ちが多かったことなどを踏まえ、本単元では、棚・テーブル製作も行うようにする。
・建築資材グループは、外装ユニット製作の他、同様の工程で作れるプランター製作も行うようにする。
・外装ユニットの製作では、耐水性を高めるためネジ穴へのダボ打ち、塗装の厚塗りなど工程・工法を検討する。その過程で、建築資材グループの工程の見直しを行うこともある。
・作業活動に関連する壁新聞作りやチラシ作りなども生徒が行うようにし、見通しや期待感をもちやすくする。
④場の設定、教材・教具
・生徒が活動しやすいように、工具や工法の見直しを行う。
・外装ユニットの形状は、外観・扱いやすさ・加工しやすさ・活動量などを考え、確定する。
・木れんが設置については、対象の場に砕石や根が多いことから、設置しやすい場を継続的に検討していくと共に、生徒が取り組みやすいように深く掘削しなくても設置できる木れんがのサイズの見直し等も行っていく。
⑤教師・友達のかかわり
・４グループの教員配置は、前単元の配置をベースに、生徒の所属変更やグループの活動量などに合わせ、適切な支援が行えるよう見直しを行う。
⑥保護者・地域の人々とのかかわり
・前単元同様、活動計画・実施の過程で造園・建築関係の専門家の助言を随時受けていく。
・前単元では、建築グループが専門家と活動を共にしたが、本単元ではその結果活動習熟もあることから、より設置に困難が予想される土木グループと専門家の共同作業を検討するなど、専門家との共同作業内容の見直しを行う。

【資料２】授業研究会記録の整理
①単元・題材の設定
・実際的なテーマ・本物のテーマは、本物のやりがいと手応え、本物の生活力の育成を必然する。
・テーマに対する強い思いが生徒たちの頑張りを支えている。各グループでの仕事の勢いの裏付け。
・ミニショップ「なかま」の意義。①製作過程で地域の専門家と連携することで、より主体的な仕事の実現と地域社会に位置付く活動の実現になる。②地域に開かれた販売設備の整備は、買い物に来られる地域の方々との関係を深めるし、日常的な販売活動により地域での働く活動の日常化を確かにする。
②日程計画
・10/16の授業は単元を通じての目標達成の日だったので、終了時に集まって時間をとったのはよかった。（木れんがグループ）
③活動内容
・担当の生徒さんは判断業務をうまくこなしている。（建築グループ）
④場の設定、教材・教具
・安全な状況下で実際的な工具を使った働く活動は、将来の社会生活と重なる。
・切断の補助具、安全でかつ材の流れスムーズ。２工程にしてかえって効率が上がったのは、一つの研究成果。（木れんがグループ）
・切断の第２工程、押す際にやや前のめりか。もう少し手前で完了できれば。（木れんが

グループ）
・タッカーはたいへんスムーズ。補助具の扱いのスムーズさやタッカーの扱いの順調さ（換えの用意等）が根拠となる。（木れんがグループ）
・材の置き場等、配置に無理がない。（木れんがグループ）
・室内の塗装は６個まとめて効率的。一人で進めやすくなっている。スポンジの利用も塗料のつけすぎがなくよい。塗る際６個の材が動くことがあるので、押さえや枠があれば安定しそう。（木れんがグループ）
・屋外の塗装は、室内からの材の流れに無理がない。（木れんがグループ）
・仕事の終わり、みんなで集まるスタイルであれば椅子を出して座った方がよいかもしれない。（木れんがグループ）
・堀りおこしは場所が定まり、見通しもちやすい。スコップも適切な大きさ。バケツがもう少し大きくてもよいかもしれない。やはりプラスチックより堅牢な金属性などがよいように思う。（土木グループ）
・工程間の材の流れがスムーズ。室内と屋外の材の受け渡しの流れもよい。(資材グループ）
・印付けは慣れた動き。たとえば椅子を高くするなどして、視点を高くすれば上から塗った場所を確認しやすいかも。（資材グループ）
・場が離れていても、完成に向けた勢いを感じる。（資材グループ）
⑤教師・友達のかかわり
・二人一組の業務。押さえる人（先生）と打つ人（生徒）という分担だが、固定可能な上の部分を先生がまず打っていくという方法での分担もあり得ないか。しかし、この分担は生徒同士では難しい。（建築グループ）
⑥保護者・地域の人々とのかかわり
・地域の専門家との共同作業の意義。①作業の精度を高める。②地域の人や産業とのつながりを拡大する。

【資料３】授業反省結果の整理
①単元・題材の設定
・６月に建てた「ミニショップなかま」を生徒の意見を取り入れてきれいに整備するという設定は良かったと思う。（複数）
・店舗ができたことで、継続的な生産から消費までの作業学習が展開できるようになった。
②日程計画
・５時間目のチラシ作りやパーティーの準備などもう少し前から取り組めると良かったのでは。バタバタしていた。そのためには日程をもう少しとっても良かったように思う（資材グループ）
・最終日のオープンセールは、お客さんが予想以上に少なかったため、ちらし配りをもっと事前に行う、保護者の迎えが多い曜日に設定するなどの工夫が必要と感じた。
・３～５時間目の活動であったが、グループによっては、２時間目から活動を行ったほうが、ゆとりをもって活動できたかもしれない。
・１日の日程の中での活動時間について難しさを感じた。
・年度当初の単元計画は３週間であったが、ミニショップ完成の販売準備のため１週間を作業にあてた。作業では販売物の準備ができ、意欲がもちやすかった。
・打ち上げは完成したという生徒の気持ちが盛り上がり良かった。
・前期に行っていてスムーズであった。
③活動内容
・計画の段階で、建築や造園の専門家が何度も相談に応じてくださったことで、より良い活動内容を考えることができた。
・前単元と同じメンバーで、同じような内容に取り組むことで、生徒も活動に取り組み

やすかったのではないか。
・土木グループと、建築グループの活動場所が重複していたが、臨機応変に活動内容を工夫することで、うまく調整できていたように感じる。
・毎日の通信に教師以外がかかわるようにということで、３年生の生徒と先生方にお願いしてしまったが、生徒の感想、生徒が撮影した写真の掲載、各クラスへの通信配布、廊下への掲示など、生徒ができる部分でかかわれたのは良かったと思う。
・進行状況に応じて、生徒の活動や取り組む人数を増減して活動時間や進度を調整した。決まった期間、ほぼ十分な活動量を確保できたかと思う。が、もう少し期間があったら、あれやこれも生徒にお願いできたかもと思うこともある。（建築グループ）
・一つの活動内容を繰り返すことだけでなく、同じ単元、あるいは似たような単元を繰り返すことでより見通しをもつことができたり、内容を深化させることができた。
・建築や造園の専門家と連携できたことはとても良かった。私たちだけではでないアイディアをもらった。
・６月に行った前単元を見直して、ガラッと変えるのではなく修正できたのが良かった。

④場の設定、教材・教具
・木れんがグループでは、場の設定と補助具の検討を重ねることで、個々の活動がスムーズになり、前単元よりも早いスピードでたくさんの木れんがを作ることができた。しかし、より自立的な姿を望むための支援の改善の余地はまだあった。
・資材切り、墨つけでは前単元で用いた補助具を活用したため、スムーズに取り組んだ。外壁装飾では、生徒の実態に応じて場の配置や取り組む場所を設定することでそれぞれが満足できる活動になったと思う。インパクトドライバの使用を繰り返すことで、習熟度は飛躍的に進歩した。（建築グループ）
・全グループが近い場所で活動できるのであればそれに越したことはないが、物理的に仕方がない。
・他のグループが何を行っているか見る機会があっても良かった。
・旧陶芸室は照度の問題等があったが、生徒が活動に集中できる場所が設定でき、生徒が力を発揮できた。生徒の可能性が広がった。
・集中力を持続することは難しいが、集中力を切らさず３週間活動できるようにしたい。
・前単元での課題をふまえ授業改善を行い、生徒の姿からより良い活動にすることができた。
・廃材、専門業者がこれまで捨てていた残塗料の使用などが専門業者からも認められ、連携が成立した。
・製品もエコ製品を中心に展開している。

⑤教師・友達のかかわり
・自分の行った仕事が次の人に直接渡るのを見て励みにしている様子が見られた。
・外壁装飾では、職員とあるいは生徒同士でペアを作って活動した。職員とペアを作った生徒は、木工ねじが曲がったときやうまく打ち込めない時等教師にしっかりと伝えることができた。生徒同士のペアでは、ねじを打ち込む係とユニットをおさえる係を分担した。おさえる生徒にはねじがしっかりと打ち込まれているか確認する役割もお願いした。その結果、やり直しが必要なケースには、しっかりと相手に伝えたり、それに対して応じたりと行った会話が自然に生まれていた。（建築グループ）
・集会活動の際には、あいさつをしっかり行うことや脱帽について確認しながら進めた。生徒同士でお互いの帽子の様子やあいさつについて確認し合うようになってき

た。（建築グループ）
・前単元と同じグループにすることでより「なかま」という意識が強まったように感じている。こちらがあえて設定しなくても同じ目的に向かって活動する中で自然に意識が生まれた。

⑥保護者・地域の人々とのかかわり
・自分達の作った商品が売れているということが分かるために直接販売することも今後考えてもよいのでは。
・地域にも、保護者にもオープンセールのお知らせ等をもっと工夫して、活動に取り入れて行えばよかった。
・毎日の通信は、写真が大きく、見やすくて、保護者にも良く様子が伝わったと思う。
・全く知らない方に商品を介して話しかけていただけた。
・生徒が作ったものであるということの表記があると良い。